

## 「わが恩師」

藤田 喜久

川崎医科大学 麻酔・集中治療医学1

大学を卒業して30年近くが過ぎた今、自分の人生を振り返ってみると、その節目節目で、多くの先生や先輩方に助けられ、支えられ、励まされてきたことを痛感する。その意味で自分以外すべて師であるという考えもある。しかし「あなたの恩師はどなたですか？」と問われれば、川島康男先生とメスマー教授 (Prof. Dr. med. Konrad Meßmer) の二人をあげたい。

大学入学前に大きな挫折を経験した私は、ひとつだけ自分に誓って大学に入った。それは将来、「あの時ああすれば良かった」、「もっと勉強しておけばよかった」などと後悔することのない大学生活を送ることである。といっても、医学部の勉強は小学校のように科目が多く、しかも各科目間の連携は少ない。それらは、どうせ半年もたてば忘れてしまうような知識の羅列であったので期末試験でいい成績をとることを目標に毎日勉強する気にはなれなかった。それにしても今の医学生と違って、時間は有り余るほどあった。大学でしかないもので生涯残るものをもと案して、ドイツ語を勉強することにした。ちょうどそのころにサンケイカラシップという奨学金制度があり、これに合格すれば1年間自由に欧米の大学に留学でき、生涯にわたってなんの制約はないという信じられないほどうまい話であった。かなりの難関であったが、努力のかいあって5年生のときに大学を休学して、西ドイツのチュービンゲン大学に1年間留学できた。

ということで、大学卒業は1年遅れたが、私は普通の医学部学生とは違った1年間を送ったのである。三重大学を卒業するとき、同級生の多くは三重大学の医局に入ったが、一度は日本の中心の東京に出たいとの思いもあり、ペインクリニックで有名であった関東通信病院麻酔科に入った。その時の麻酔科部長が川島康男先生であった。当時（今もそうであるが）関東通信病院は東大の有力な関連病院であり、東大麻酔科から1年前に赴任されたばかりであった。川島先生は広島大学卒業でフルブライト留学生であり、東大の麻酔科内で評価が高く、関東通信病院麻酔科部長として赴任されたものと思う。

私はただ一人の麻酔科レジデントということもあり、川島先生にゼロから丁寧に麻酔を教わった。当時、関東通信病院麻酔科には東大の外科や麻酔科から研修医が数か月ごとの交代で麻酔を勉強に来ており、和やかな雰囲気にもそれなりに競争意識があった。その中で、焦る私を急ぐことなく、単なるローテートで麻酔を勉強するのではなく麻酔科医となるべく育てていただいたように思う。川島先生が普通の麻酔科医と大きく異なるのは当時めずらしかった小児麻酔を専門とされ、そしてまだ発展途上にあったICUを関東通信病院に新設されたことである。その縁もあって、院外研修として神奈川県こども医療センター、名古屋市大学麻酔科をそれぞれ4か月研修することもできた。

川島先生は学術的活動に熱心であり一般病院の部長でありながら、多くの専門書を表され、

またのちには専門誌の「臨床麻酔」の編集主幹もされた。定年後は帝京大学麻酔科教授として招かれた。

私は、偶然に川島先生に出会ったわけであるが、一般病院の麻酔科部長として臨床を大切にされ、しかも大学の麻酔科教授にひけをとらない学問への探究心旺盛な先生に教わることができたことを幸運であったと思う。もし川島先生に麻酔科医としてのトレーニングを受けなかったら、麻酔科の面白さを十分に理解できないまま、他科に転向していたように思う。人を教える立場になった今、私は川島先生にしていたように親身に医局員に対してふるまっているかどうかをいつも自問している。

私のもう一人の恩師はメスマー教授である。

関東通信病院での1年目の冬に製薬会社主催の講演会が都内のホテルであった。招かれてきた講師はミュンヘン大学教授のメスマー教授であった。講演会後の立食パーティの席で、私は勇気を出してメスマー教授に話しかけた。私にとって運命の出会いである(写真)。

メスマー教授は、突然にドイツ語で話しかけられたことに一瞬驚いた様子であった。暫くとりとめもない話をした後、「私は、この春に大学を卒業したばかりの麻酔科研修医ですが、将来ドイツに留学したいとの夢があります。」と切り出した。「その願いはわかりました。後から、手紙をください。」との返事であった。ドイツ留学が決まった瞬間である。

そして5年後に、ドイツハイデルベルク大学



メスマー教授との出会い(1978年、東京プラザホテル)

のメスマー教授のもとへHumboldt研究奨学生として留学が実現したのである。Humboldt研究奨学金はドイツ政府が国籍や信条を問うことなく世界中から、40歳以下の若手研究者にドイツ滞在中の資金を提供するものである。これに合格したのは幸運であったが、メスマー教授の強い推薦があったものと想像している。

私にとってメスマー教授の下での研究生生活は期待したとおりであり、一日一日が貴重な経験であった。学位も業績もない私を拾い上げていただいた恩はありがたく、一所懸命頑張った。私には医局の世話で日本の大学から派遣されてきたのではなく、自分でメスマー教授の門をたたいたという自負があり、留学生ではあるがゲストではなくメスマー教授の直弟子であるという意識があった。

メスマー教授のもとには多くの野心ある若手医師がとくにミュンヘン大学麻酔科から研究のために集まってきた。彼らの多くは医師になっておよそ10年がたち十分な臨床経験はあるものの臨床だけには飽き足らず、さらにアカデミックキャリアをめざしていたのである。彼らも臨床の仕事や家族との離れた生活などなにかを犠牲にして、研究を行っていた。それだけに真剣であり、彼らとは気が合い生涯の友人となった。彼らとは、50、60歳になっても、苗字ではなくFirst name(ドイツ語では、家族や仲間同士では“Du”をつかう)で呼び合う仲であり、私には貴重な財産である。メスマー教授のもとで研究していたときは、私が一番輝いていたときであったと思う。ドイツ人の彼らも自分達のことをそう思っていると想像している。私たちメスマー教授の同門は自嘲気味に自分たちのことを“ミュンヘンマフィア”といっている。

メスマー教授との交流は今も続いており、ドイツへ行くたびにお会いし、折々に近況を報告している。私が川崎医科大学教授に昇任したときに、メスマー教授に報告の手紙を書いた。その返事の中に次の文章があった。

Wir sind stolz auf Sie. (英語訳: We are proud

of you.)

この言葉にメスマー教授に褒めていただいたと感じ、感動した。

昨年、初期研修医（現在は麻酔・集中治療科臨床助教 松本佳子）の海外研修の世話を頼むためにメスマー教授の同門であるミュンヘン大学麻酔科主任教授に20年ぶりに連絡を取った。彼からはすぐに承諾する旨の返事が届いた。そして川崎医大への返事の中には、次の文章があった。

We are happy to hear that Prof. Fujita is reinforcing the tie with Munich University, again.

これも私を感激させた言葉である。メスマー教授を師とする同門として私はドイツから応援されているのだと胸が熱くなった。

教師と弟子は、教える者と教えられる者との関係であるが、恩師と弟子との関係は、感情的なものであり、その関係に加えて、自分の方々に期待されている、そして褒められたいという気持ちを持つ人が恩師であると私は思う。

